
ヒガミの名を持つもの

齊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヒガミの名を持つもの

【Zコード】

Z2470Y

【作者名】

齊

【あらすじ】

幼少期に仲の良かつた主人公の緋神ひがみ 空弥くうやと峰みね 理子りこ。

二人はある日会えなくなつた。

そんな二人は高校生になり【東京武蔵高校】で再会するが…

bullet · 00 「protoype」(前書き)

初めまして、齊です。

今日受験の面接が終わり、その記念にコーラー登録しちゃいました
初めて小説を書くので他のコーラーさんのように上手くは書けない
と思いますが、読んで感想なんかくれると嬉しいです

彼女と再開する日の前日、俺は夜更かしをした。

俺には小さい頃、夏休みなどの長期休暇だけだが、毎日のように遊んでいた女の子がいた。

彼女はとても元気で明るくとても可愛らしい女の子だつた。彼女の父親は彼女が物心つき始めた頃に亡くなつたらしい。それでも彼女は母親と過ごす毎日が樂しいらしく、とても明るかつた。

俺が小学校に入学した年、彼女と俺はある約束をした。

俺はその子と遊んでいる毎日がとても楽しかつた。こんな毎日が続くと思っていた。

だが、その翌年の夏、彼女はこなかつた。お母さんが亡くなつたらしい。彼女は天涯孤獨となつた。

俺は父親に家で引き取る提案をした。

父親は賛成してくれたが、数日後、ある事実を父親から聞かされた。彼女は親戚に引き取られたらしい。

俺は彼女と暮らせないのは悲しかつたが、『引き取られて幸せになつてくれるならいい』と自分に言い聞かせた。

父親に誰に引き取られたのか、どこに住んでいるのかを探してもらつたが、分からなかつた。

『暮らすのは愚か、もう会えないんだ』そう思つと頬を一筋の涙が伝つた。この感情を止められなかつた。次の日から俺は父親との特訓が始まつた。特訓は俺から頼んだ。

その特訓は予想以上にきつかつた。何度も死にかけた。だが、俺は何度も乗り越えられた。

彼女が支えになっていた。

強くなるため、いつかまた彼女に会つた時に彼女を守れるよう、そして何より……悲しみが溢れてこないよ。『もう…会えない』といふ。

それから7年後

中3の初冬。俺は父親からある情報を貰つた。
彼女が東京の武偵高校というところを受験するらしい。
いや、正確に言えば「彼女らしい人物が」だが。
なぜ「らしい人物」なのかと言つと生年月日・年齢・性別そして名前が彼女に一致しているからだ。

俺はその情報を彼女と信じ《東京武偵高校》への受験を決めた。

翌年

俺は受験会場で彼女らしき人物とは会つことのないまま受験を終え、入学した。昨日は期待と嬉しさであまり眠れなかつた。

今、鞄を自分の教室へ起き、入学式へと向かつている。

入学式

正直、ダルい。校長話しながい。体育館なのにタバコ吸つてる先生いるし……ハア
なんて学校だよ……
えつ？《東京武偵高校》？んなこと分かつてんだよ！
お前が聞いたから答えただけだあ？……分かつたもつ反論しない。だからもう話し掛けないで。

そして、一気に疲れたが無事に入学式は終わった。
すると懐かしさを感じさせる女の子がいた。

すると体が勝手にその女の子の方へと動き出し、声を掛けた。

俺「あの……ちょっとといいかな？」

女の子は立ち止まり振り返った。

女「ん？ 理子に何か用？」

あれ？覚えていないのか？

俺「あ……いや……俺の事覚えてる？」

理「????ん……分かんないや 人違ひなんじやない？」

この雰囲気、話し方、恐らく間違いない理子だ。でも……俺の事……

俺「……そうかもしれないな」

理「？誰か分かんないけど、もつ用がすんだなら理子もつ行くね」

俺「ああ。呼び止めて悪かつた。」

理子は、俺の事を覚えていない。理子の記憶から俺は消えている。
あの約束も。なら、無理に思い出させる必要はないだろ？ 俺との
思い出なんて。思い出したらダメなんだろうな。

俺も、昔の事は胸の奥へとしまっておこう。

こりじて俺は理子と関わらないよう一年が過ぎた。

どうでしたでしょうか。

至らない点や、間違っていた部分、意見やアドバイスがあればください。

それでは、

次回に続きます。

今回はまだみんなが一年生の時の...つまり、アリアがいないときの話です。
お楽しみください。

俺は理子と関わらないようにして過ごしてきた。だが、一度関わってしまった。まあ、その事からキンジと関わり始めたんだがな。

それは入学して理子と関わらないと決めてから数日後に起きた

昼休み

空「失礼しましたあ」

俺は高天原先生に呼ばれて職員室に来ていた。そんで、話は終わつて出てきたことだ。内容は俺が強襲科を辞めると言つたからだろう。俺は理子がいたから、理子を守れる力が欲しかつたから強襲科に入つたが、その理子と関わらないようにしたのなら強襲科にいる必要はなくなつたつてわけだ。入つてすぐだつたから先生にいろいろ聞かれた。途中で綴先生が入つてきて、結局一度綴先生のいる『尋問科』に入ることになつた。結局俺には尋問は向いていなくていろいろ試した結果『通信科』に落ち着いた。

そんなわけで疲れて職員室から出てきてそのまま教室に戻つてそのまま机に突つ伏した。するとそこに理子が来た。

理「ねえ、お昼ご飯食べないの？」

空「！？」

理子が眼前にいる。関わらないようにしていた俺はとても驚いた。

理「ねー…きーてるの？」

空「あ、ああ」

理「答えになつてないー」空「あ、『ごめん』ごめん。お腹空いてない

からな。」

理「お弁当持つてきてないの？」

空「持つてきてはいるけど…」

それを聞くと理子はにせつとした。

理「理子ね… 今日お弁当持つてきてないの… 作り忘れてきちゃつて… おなかすい…」

空「なら食つか? 食べないともつたいなし。」

余計なことを言つてしまつた。

理「いいの…?」

最初からその気だつたみたいだけど一応驚いとくみたいだな。

空「いいよ。気にするな。ほらよ。」

俺は理子に弁当を渡した。理「ありがと…」

空「ああ。んじゃ。」

俺がもう一度寝よつとする…

理「…ねえ理子、ここで食べていいかな?」

空「へ?」

理「へ? ジャないよ。返して来るのめんどくさいから。」

空「まあ…いいけど。」

理子は俺の前の席の椅子をさかに向けて俺の机に俺の弁当を広げた。

理「わあ。すこしおいしそう いつただつきまあす」

理子と関わらないと決めたばかりなのにな…

理「そういえば君つてさ」

空「ん?」

理「入学式の時話し掛けてきたよね?」

空「え? あ…まあ…」

理「誰と間違えたの? それとも理子りんのファン!?」

空「いや…知り合ひの女の子と見間違えちゃつて…」

理「ふーん…」

そのまま理子が食べてい

ると一人の男子武偵校生が今日に入ってきた。その男子武偵校生徒を見た途端に理子が手を振つてそいつに話しかけた。

理「キーくうん」

キ「なんだよ。」

これがキンジだ。キンジはいつに来た。

理「キーくんお皿は食べたの？」

キ「あ？ たべたよ。」

理「そつか。じゃあお喋りしようか。座つて座つて。」

理子が隣の椅子を引いてどこかに行こうとするキンジを座らせた。

理「キーくんに紹介しましょう」この人は……この人は……

空「緋神空弥だ。」

理「おおいい名前だねえ じゃあキーくん、この人は緋神空弥くん
気軽に空弥くんって呼んであげちゃって。」

キ「なんで理子が呼び方決めてるんだよー名前も知らなかつたのに
いきなり名前のくん付けかよー。」

理「いーじゃん。ねえ、空弥くん。」

空「ああ、構わないよ。」

理「ほらあ本人もいーつて言つてるよお 」

キ「すまないな理子が迷惑を掛けて。」

空「…気にするなよ。」

理子つて呼んでんのかあ…まあいいか。仲良さそうだしな。

理「んでえ、こっちがあ」

そういうて理子がキンジの腕に抱き付いた。

理「私のダーリンのキーなんだよお。」

それを聞いたとたんなんとも言えないイライラと言つか嫌な気分になつた。

キ「誰がダーリンだーあとくつくなー！」

理「もう、キーくんたら照れ屋さんなんだからあ 恥ずかしがらな
くてもいいのにー」

キ「恥ずかしがつても、照れてもねえー！」

理「キーくんのいけずう。」

キ「いーい・か・ら、は・な・れ・るー」

空「……」

キ「やつと離れたかあ……」

理「モー！ブンブンだよ。」

キ「しるか、んなの。……あ、俺は遠山キンジだ。気軽に呼んでくれ。」

「

空「じゃあキンジ。……お前、峰さんと付き合つてたのか？……」

キ「ひがう。理子が勝手にいつてるだけだ。俺は理子と付き合つていなーい。」

空「そーなのか？」

キ「そーだよ。」

空「……そつか。」

その答えを聞いて少し気分が明るくなつた。

そのあと喋つて授業を受けて帰つた。

明日からは関わらなこよつに気を付けよ。

これがキンジとの出会いだつた。

どうでしたか？

こんな話でも、読んでくれる人がいるなら嬉しいことです
それではまた次回

bullet-02 「bicyclejacking」(前書き)

二話目です。

タイトルと話の内容は時期だけしかあっていませんね。
あはははは……

チチチチツ

スズメが鳴いている

不「お目覚めですか?」

俺「んあ?ああ…」

不「おはよう」「さ」

俺「ああ、おはよう」

俺の名前は緋神 空弥。んで、さっきから俺に話しかけて来るのは不知火 亮。不知火は東京武偵高校2年A組で専門科目は強襲科でAランク。遠山キンジの親友で、イケメンかつ礼儀正しく真面目な性格の常識人である。キンジ曰く「武偵の中でも数少ない人格者」。格闘・ナイフ・拳銃どれも信用できるバランスの良いスキルの持ち主で、対テロ活動にも優れている。武藤とは逆にモテるが、浮いた噂が流れないのでホモではないかという噂が流れている。さらに、俺は不知火とはルームメイトもある。

強襲科のAランク武偵がルームメイトとは何とも心強いものだ。

不「朝食出来てますので食べて学校へ行きましょう。」

俺「おお、ありがとう。」

気の利く良くてできたやつだよ。全く。

俺達は食つもの食つて寮を出た。

バス停に着き、少し経つと男子寮の方からトボトボと星伽 白雪が歩いてきた。

大方の予想はつく。恐らく遠山 キンジ(とうやま きんじ)のところに行つて先に行けとでも言われたのだろう。

星伽等のメインキャラについては詳しくは説明しない。知らないやつはwikiで調べる。

不「おはよう」ざいます。星伽さん。」

白「おはよう不知火くん。緋神くん。」

空「あーおはよう。」

俺はあんまり人と関わりたくない。だから、白雪の相手は不知火に任せている。

空「はあ…」

今日もまた退屈な一日が始まるんだろうな。

教室

俺は不知火や白雪と別れて教室の自分の席に着いた。ちなみに不知火はA組、白雪はB組、んで俺はC組。今これを読んでる君は、これの原作を知つて分かつてるだろ? 俺は名前を出す。

A組は不知火の他に、アリア、キンジ、武藤。そして…理子。

B組は白雪の他にはジャンヌだな。

C組は俺の他に、レキと中空知だ。

てなわけで、また本編に戻るよ。

空「はあ…」

窓側の席で、窓の外を見ながら溜め息を吐くなんて…なんてお決まりなんだよ…俺つて…

空「早く帰りてえ。」

俺が独り言のように呟くと俺の後ろの席の武偵校生、中空知 美咲なかそらち みさきが自分の席につきながら俺に話しかけてきた。中「幸せ逃げちゃいますよ。」

まあ人前であんまり喋らないやつが俺と話してくれると言つのはいいもんだな。

まあこのクラスにはあんまり喋らないやつが他のクラスに比べて多い。

だから中空知もまだ過ごしやすいのだと想つ。

俺は今、中空知と同じ通信科だ。

空「だけど、毎日毎日退屈である。」

中「毎日毎日、溜め息ばかりついてるからじゃないですか？」

空「そんなもんかな。」

キーンコーンカーンコーン

朝礼が始まった。

しかし、俺は眠ってしまった。

バンバーン

空「！？」

俺は銃声で起きた。

空「なんだ今の音は！？」

中「銃声…ですね。」

空「なんで学校内で銃声が…」

先生が騒いでないって事は侵入者とかじゃないみたいだな。

中「先生が慌ただしくないようなので大丈夫ですよ。」

中空知も同じ考え方。

空「いつでも落ち着いてるよな中空知は。」

中「通信科は冷静な判断が出来なくてはいけませんからね。」

空「見習うよ。」

中「緋神さんも発言とは裏腹に落ち着いてるようですが。」

空「そんなことはない。」

まあこんなのは珍じや日常茶飯事だからな。でも校内でののは正直驚いたよ。

中「もし事件だとしても、このクラスには緋神さんやレキさんもいらっしゃいますから心配する必要がないんです。」

空「レキはともかく、俺は通信科だぜ？」

中「以前は、強襲科アサルトに居ましたよね？」

空「まあ一応。でもすぐ辞めたから居たってことはないならねえよ。」

中「ランク、高くありませんでした？」

空「そんなこと…ねえよ。」

そのまま、午前の一般授業を受けて、昼食を摂りその後、午後の専門科目、^{「ホネク」}通信科を受けに行つた。

中空知は通信科でもすば抜けて成績がよく、しかもAランク武偵だ。しかも高いランクの依頼を受ける強襲科などのオペレーターを務めるすごいやつだ。人前ではあまり喋らないがモニターでの音声通信なら人が変わったようにスゴく頼りになるオペレーターになる。ちゃんとオペレーターを務められるように個室で一人でいつもやっている。だから通信科での中空知の身の回りの事はまあまあ仲の良い俺がやるようにしている。

空「中空知、ほいお茶。」

中「ありがとうございます。」

空「今日の依頼は？」

中「まだ来ていません。」

空「そうか。」

中「そういえば今日、2A（2年A組）の遠山キンジさんが武偵殺し、チャリジヤックに会われたそうです。」

空「はつ！？まじ！？」

中「わざわざ嘘なんて言いませんよ。」

空「そうかあ…学校で見掛けたって事は、無事だったんだな。」

中「転人生の神崎・H・アリアさんと一人でどうにかしたらしくですよ。」

空「女か？」

中「そうですよ。」

まあ…名前からして女だとは分かつていたが…キンジのやつ大丈夫だつたのかねえ。いや、なつたかもな。キンジのことだからあの状態のキンジを見られてまたややこしいことに巻き込まれるんだろう

な。

空「……そつか。」

中「どうかしました?」

空「……いや、なんでもない。」

校門

空「んじやまた明日な。」中「はい。それでは。」

俺は中空知と校門のところで別れた。

寮

ガチャ

空「ただいま。」

不「お疲れ様です。夕食の準備出来ていますよ。」

空「ああ、ありがとうございます。」

俺はさつさと飯を済ませ、風呂に浸かった。

帰りにキンジに電話でチャリジャックについて聞いた。

簡単に言うと、バスに間に合わなかつたから自転車で行こうとして自転車こいでいたら機械音で「この自転車には爆弾が仕掛けられてやがります。」とか何とか言われたらしい。自転車に付いていたものから。

すると続けてスピードを落としたら自転車のサドルの下に付いていた爆弾が爆発して、自転車から逃げようとしたら撃たれる状況だつたらしい。

誰に撃たれるのか聞いてみたところ、セグウェイの上に装備されているジコエが撃つてくる様だつたらしい。

そんな危機的状況を救つてくれたのが神崎アリアらしい。結局7台に増えたジコエに見つかり、倉庫に隠れたらしい。そんときになつてしまつたようだ。あのモードに…ヒステリア・サウ、アン・シンドローム。キンジ曰くヒステリアモード。キンジが恐れているもう一つの人格を持つキンジを引き出すモード。効果は性的興奮を感じ

る思考力・判断力・反射神経などが通常の30倍にまで向上する。かなり凄いがキンジはこれのせいで大変な目にあっているみたいだ。まあそれになつたから助かつたがそのお陰で結局神崎アリアから曰を受けられたらしい。災難続きなやつだ。

俺はキンジと1年時に仲良くなつた。だが俺は、キンジと仲良くなつてはいけなかつた。俺は想像もしていなかつた。あそこまでキンジと理子が仲良くなるなんてな。

理子と関わらないようにしている俺としてはかなり不味い状況だ。どうしたものか…

俺は風呂から上がつて携帯を見ると電話とメールが来ていた。どちらもキンジからだつた。メールを開いてみると、神崎がキンジの寮室にきたらしい。そんで、強襲科に戻つてペアを組めと言つてきたらしい。承諾するまで泊まり込みで持久戦らしい。

同棲かよ…しかももう名前で呼んでんだな。メールで神崎のことリアつて書いてるし。

まあ俺は関わらないから良いけど。

俺は携帯を閉じて眠つた。

このときの俺はまだ、この神崎と関わることないと確信していた。

bullet-02 **「bicyclejacking」(後書き)**

すみません。全然チャリジャックに関わりがありませんでした。
それではまた次回。

bullet-03 「busjacking 1」(前書き)

久しぶりの投稿です
お久しぶりです
書いていたのですが
1つじゃ足りなくなりそつだつたので2つに分けました
ではどーぞ

あれからしばらく普通にいつも通りの生活が続いた。その間にも色々とあった。今では神崎をアリアと呼ばなくてはならくなってしまった。キンジもこんな風に：まあいいか。

数日後

俺は朝早く起きて俺と不知火の分の朝食を作った。

不知火が起きてくる前にシャワーを浴びた。

俺がシャワーからあがると不知火が制服に着替えて起きてきた。

空「起きたか。」

俺が髪をバスタオルで拭き続けていると…

不「シャワー浴びてたんですねか？」

空「ああ。朝のシャワーきもちいいぞ。」

不「確かにそうですね。僕は休みの日にしか朝シャワーは浴びませんが確かに気持ちのよいものです。今日朝食ありがとうございます。」

空「いつも作ってくれてるからな。」

不「いえ、僕は大したことはしていませんよ。」

たわいない話をして俺達は学校へと向かうバスに乗った。

それにしても今日は妙な感じがするなあ…

気のせいかな。

バス

バスに乗つて少し行くとキンジのいる寮の前に止まった。だがキンジは居なかつた。

到着したときキンジの親友2の武藤剛氣むとう じょうきが言葉を発した

武「キンジいねえなあ。また寝坊があ？」

バタンッ

扉は閉まった。

そのままバスは武偵校に向けて再出発した。

空「そーなんじゅね。またチャリジャックされたりしてな。」

不「遠山君の自転車は今は大破していますし、流石の遠山君でも星伽さんがいるので寝坊はないでしょう。」

空「でもキンジは何かやらかしそうだよなあ。」

武・不・空「「ははははは」」

そのまま武偵校につくはづだつた。…だがそんなとき…バスに乗つていた女子武偵校生の鞄の携帯がなつた。

ピロリロリンピロリロリン ピロリロリンピロリロリン

女「ごめんなさい。私マナーモードにしたはづなのに。」

彼女が携帯を開いてボタンを押すとスピーカーフォンでバス内全体に聞こえるように機械音が喋り始めた。

女「ん?」

携「このバスには、爆弾が、仕掛け、あり、やがります。」

空「なんだ!?」

携帯からは続けて言葉が発せられる。

携「速度を、落とすと、爆発、し、やがれです。」

すると運転手が震えながら言つた。

運「ほ、ほんとに、バスジャックなんですか」

武「多分、間違いないです。俺のダチん時も、こんな感じだつたんで。」

携「乗客は、大人しく、し、やがれです。」

武「不知火。爆弾あつたか?」

武藤がそう言うと不知火は顔を横に振る。

不知火だけじゃなく他の武偵校生徒も協力してバス内の爆弾を探している。

もちろん俺も探すフリはしている。だが武偵殺しがバスの中に爆弾を設置するなんて考えにくい。恐らくバスの外側にあるだろう。

武「ちつ！」

携「警告は、守り、やがれです。」

携帯からその言葉が発せられると後ろの方から黄色のスポーツカーが走ってきて、バスの横に並走し出した。

それに気付いたのは俺のほかには不知火だけのようだ。

不「つ！」

不知火がそのスポーツカーをみていると、そのスポーツカーの助手席の所からエコエが出てきた。

不「みんな！ 伏せろ！」

ババババババババババ

UNIから無差別に9mmパラム弾が連射された。

空「つてえー！」

運転手がすぐ横にいる武藤に話しかけた。

運「だ、大丈夫か、君。」

武「つつ！ あんにやるー！ 防弾制服つて言つても当たると痛てえんだぞ。」

確かにそなんだよな。痛てえんだよ。

武「みんな、大丈夫か？」

反応からして、一応みんな大丈夫そうだな。

不「でもこれで、僕たちは迂闊に動けなくなつたね。」

武「ああ。まあな。」

男子「くそつ！ 犯めやがつて！」

女子「どうして、こんな…」

それぞれが不安な気持ちを出していくと、今は武藤が手にしている、あの携帯がなつた。

ピロリロリン ピロリロリン

携「ホテル、月光前を、右に、曲がり、やがれです。」

バスは言われた通り曲がった。

bullet-03 「busjacking 1」(後書き)

前書きがつなので次話も今日投稿したいと思つています

ではまた次話お会いしましょう

バスジャックの続きです。

私は上手く文を作ることが出来ないので見苦しい小説でしょうが読んで頂けているのならとも嬉しく思います。

では続きぞ

さあて、どうするかな…

俺がどうするべきか考えていると三人の男子が銃を構えて不知火に話しかけた。

男子1 「不知火。」

不「つ！」

男子1 「手を貸してくれ。あの外車を黙らせる。」

武「おいつ！無茶するな。」

男子1 「俺達は武慎だぞ。このまま退き下がれるか。」

一緒にいた二人の男子が武藤の方を見ながら、その言葉に相づちを打つ。

それに対し不知火がバスね陰に隠れながら外を指差し意見する。

不「犯人は僕たちの動きを監視してる。」

男子2 「分かつてる。だが、もつじきトンネルだ。そこに入つた一瞬は、監視力メラにも炉室保線のタイムラグができるはずだ。正氣かこいつら。」

男子1 「そこを複数人で同時攻撃。的もでかい。いける。」

不「不確定要素が多すぎる。危険だ。」

空「もし間違えばお前らだけじゃなくここにいる全員が危険にさらされるんだぞ。やめておけ。」

俺達が止めさせようとしたが…聞かないだろうな。

男子1 「もういい！俺達だけで殺る！」

ガチャ

引き金を引いたか。やるのか。失敗すんじゃねえぞ。

あいつら三人は車側の椅子のところに体を隠して撃つ準備に入った。

男子1 「3！」

…

男子1 「2！」

…

男子1 「1！」

男子1「1！」

三人が一気に立ち上がり銃をスポーツカーへ向けた
するとその瞬間にヒズエが

ガガガガガガガガガツ

立ち上がった三人目掛けて弾を連射してきた。

だが、それだけじゃなかつた。

ガガガガガガガガガツ

もう誰も立つていないので、次はヒズエが左右に首を降りながら弾
を連射してきた。

不知火が腹部を押さえながら何かに気付いたように言葉を発した。
不「熱感知か！」

熱感知か。

はつきり言ってかなり不味い。

何人か銃弾が当たつたみたいだ。みんなは当たつた場所を押さえて
いる。

さつき武藤が言つていたがみんなが着てているのは武偵高校の制服、
防弾制服だ。だが、当たるとかなりの衝撃が来る。

どうすればいい。考える。俺はどうすればいいんだ。冷静になれ。
兄さんなら…兄さんならこんなとき…どうする…

空「うわっ。」

いきなりバスがおかしな動きをし出して体勢を崩した。

女子「きやー！」

ブーーーーー

運転手が気を失っている。さつきのヒズエの弾が当たつたみたいだ
な。

武「ちきしう。」

武藤が安定させるためにハンドルを握つた。

空「みんな、まず落ち着け。なにか策はあるはずだ。……つ！武藤

！そんなところで立つたら！」

武藤はU.N.Iを視界に入れた。

武「なつ！」

俺が立ち上がりU.N.Iを壊そうと思ったその時。

キーン

誰かの銃弾がU.N.Iを捉えた。

バンツ

U.N.Iを支えていた物が折れU.N.Iが倒れた。銃弾が飛んできた方向を見ると車両科の車から身を乗りだし拳銃をスポーツカーの方に向けているアリアの姿を発見した。

バンツ

キーン

アリアが放つた銃弾は見事スポーツカーの後輪へ命中した。

バーン

そのままスポーツカーはバランスを崩し、スピinnしながら壁にぶつかり爆発した。

キ「おい！大丈夫か！」

キンジが車からバスに向かつて問い合わせる。

それに対しても武藤はバスのドアを開け、答えた。

武「キンジ！気を付けろ！このバスには減速すると爆発する爆弾が仕掛けられてる！」

キ・ア「！？」

それを聞いたアリアは何か考え付いたみたいだ。

何を話しているのかは分からぬが、キンジがアリアに食らい付いているから恐らく大変な内容だろうな。

空「爆弾をどうするか…だな。…！？」

武藤が車に向かつて合図をしたかと思うと…
いきなり車が下がった。

何をするのかと思うと、車両科の車の後ろのスライドドアが開き続けてバスの後ろのドアが開いた。

空「おいおいおい…」

正気か？

アリアは車からバスへ、乗り移った。

空「おい！正気か！？わざわざ危険なバスへ乗り移るなんて。しかも、車の運転をキンジにさせるのか！？。」俺はそつアリアに言つと…

ア「あんたバカじやないの？負傷者を助けるために爆弾を解除するためににはこれが一番手つ取り早いじやない。あと、別にキンジが運転するわけじやないわ。ハンドルは固定してあるの。」

どう言うことだ？

よく分からぬでアリアに聞こつとすると次はキンジが乗り移つてきた。

すると車はカーブの所で壁にぶつかつて爆発した。

アリアとキンジはバスを見渡して被害状況を察知する。

ア「キンジ。手分けして爆弾を探すわよ。私は車体下。あんたは車内。もし見つからなくても、バスの外には出ないで。」

キ「…つ、分かつた。」

武「キンジ。運転席の下を見てくれ。車内にあるとしたら後はここだ。」

キ「ああ。」

そんな簡単などこに仕掛けないだらうな。あるとしたら…車体下。

キ「ここには無いようだな。…武藤。大丈夫か？」

武「俺はな。だが、バスはちょっとマズいな。実は燃料が漏れてる。

」

キ「なつ！？」

マジかよ…燃料が漏れてるだと？減速したら爆発するバス、燃料が無くなるとバスは止まる、最高にマズいじやねえか。

武「しかもこのトンネルはレインボーブリッジ直結だ。下手すると都心でドカンだぞ。」

キ「くそつー早く爆弾を見つけねえと。」

空「キンジ！アリアが爆弾を見つけたみたいだ！」

キ「ホントか！？」

キンジは駆け足でバスの最後部席へ行き、割れた窓から顔を出した。

アリアはキンジに向かってどんな爆弾かを言った。

ア「恐らく、カジンスキーネ型のプラスチック爆弾ね。見えるだけでも炸薬の容積は、3500?2あるわ。」

嘘…だろ？

ヤベえ量だ。

キ「マジかよ！？バスどころか、戦車でも吹っ飛ぶ量じゃねえか。車体下で解体するしかねえな。

ア「でも大丈夫よ。これなら解体出来るわ。」

キ「ホントか？良かつた。」

不「遠山君。ちょっと。」

不知火は何かを考え付いたのか、キンジを呼ぶ。

アリアは爆弾相手に苦戦している。

空「おいアリア。お前爆弾に手が届かないんだろ？俺が代わるからエンジだ。」

ア「だ、大丈夫よ、これくらい。」

まあすぐ引き下がるやつだとは思わなかつたけどな。

空「みんなの命がかかってるんだ！意地張つてないで早く変われ！」

ア「な、何よ！わ、分かつたわよ！なにも怒鳴らなくたつていいじやない。」

アリアは命綱をつかんでバスを上つていく。

空「落ち込むな。爆弾解除以外にもお前にはやれることはたくさんあるだろ。だからやれることを精一杯頑張れよ。」

ア「言わねなくたつてそうするわよ！…キンジ！？」

アリアはバスの上、俺の上を見てキンジの名を声にした。

ア「あのバカッ！」

キンジ？あれ？車内に見当たらない。

ア「キンジ！」

アリアの声に俺の上、バスの上からの声が応える。

キ「アリア！通信装置があつた。犯人のやつ、これを使ってバスの中を…」

アリアとキンジが口論している間に俺はアリア同様命綱を付けて車体下へ行く。

ア「このバカ！外に出るなって言つたでしょーそんな初歩的なこともわからないの！？」

バスを上りながら言つアリアに対しキンジは…
キ「なつ！なんだよその言い方！俺はお前が爆弾を解体している間に、こっちを」

ア「無防備過ぎるわ！早く車内にもどつ…」

空「あーもう…いりやー夫婦喧嘩するな。こっちに集中できないだろ！」

キ・ア「誰が夫婦だ（よ）」

ブーン

ア「あつ！」

今度は先程とはまた違う青色のジニイを付けたスポーツカーが後ろから追走してきた。

今はバスの外に出来ているのは三人、誰が狙われるか！

ジニイが標的にしたのはキンジだつた。

ア「伏せなさい！」

アリアは大きな声でキンジに伏せるようにいい、すごい勢いでバスの上まで駆け上がつていった。

アリアが伏せると言つたのにキンジはジニイを見据えて固まつていた。

その時…

バーンバーン

ジニイから一発の銃弾が撃ち出された。

ア「キンジー！！！」

アリアは銃弾からキンジを庇うようにキンジを後ろに倒しながら銃

弾をスポーツカーのタイヤ目掛けて撃った。

アリアが撃つと同時に一発の銃弾がアリア達を襲った。アリアがキンジを後ろに押し倒したお陰で一発目は躱せたが、二発目はアリの前頭部を掠めた。

キーン

キュルルルル

ドーン

タイヤを射抜かれたスポーツカーはバランスを崩し、壁にぶつかり爆発した。

キ「アリア！アリア！」

キンジはアリアに必死に声をかけている

アリアは大丈夫なのか？

とにかくアリアと交代した爆弾処理しないとな。

アリア無事でいろよ。

空「爆弾を解体するか。」

俺は体勢を代えた。

キ「アリア！アリア！」

俺は爆弾に手を伸ばした。

その瞬間バスはトンネルを抜けた。

空「うつーまぶしい！」

いきなりの明るさに目が眩んだ。

キ「アリア！…つー？」

空「どうしたキンジ！声掛けをやめるな！」

キ「空弥…アリアが俺を庇つて…血…」

空「つー？ちくしょう！…つー！」

俺は何のために力を欲したんだよ。もう誰も傷ついてほしくないんだよ。守れなかつた。

ブロロロロロ

トンネルを抜け少しするとレインボーブリッジの隣からヘリコプタ

一が現れた。

キ「あれは…」

空「レキ」

ふう。来ててくれたのか。なら俺はかえつて邪魔だな。

俺は命綱をたどってバスの上まで上がっていく。

俺が上がった頃レキは弾を撃つだろう。

こう言つて：

「私は、一発の銃弾。」

レキは弾を放つた。

レキが放つた銃弾はレインボーブリッジの格子を上手く通り、爆弾

に命中。そのまま爆弾は格子を抜け、海へと落ちていった。

ドーン！

激しい水柱が起きた。

この後俺達は病院へ送られ、事情聴取をうけた。

アリアには謝らなければならない。

レキにもお礼を言わなくてはならない。

だが、今は色々ありすぎて

ねむくなつて…

どうでしたでしょうか。

このような駄作を読んでいただきありがとうございます
理子と空弥をたくさん絡ませたいです でも考
えていの話上まだし
ばらく深い絡みが書けないんですね (^o^)

早くブリヂまでこきたいなあ

それではまた……

んたつだいまあ

キ「ただいまつて今回理子の出番ないだろ。」

空「えつ？…一応俺なんだけ…」「

白「キンちゃんー。なんで

キ「知るかー」というよりそんなのいらん。」

「空」と書かれていた

不「次回も見ないと風穴らしいですよ。」

お前が締めるな！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2470y/>

ヒガミの名を持つもの

2011年11月27日16時57分発行